

コラム 38—ジョン・マクマリー「平和はいかに失われたか」

「中国人が、ワシントン会議の諸条約及び諸決議について、各個別の条項を無効とし、また、これを軽視する旨を公言してきたといっても誇張ではない。これらの条約及び決議は、中国の行政組織が、国際関係の基準に適応しないという伝統的な不成熟さから生じている『特殊な政治体制』の制約を除去することを主眼としていた。したがって、それは健全な国民生活を形成し、列強諸国と協力する機会を、中国国民に与えるよう、本来意図されたものであった。

ところが中国は、ワシントン会議が条件付で中国に認めたものは当然のこととして要求しつつ、ワシントン会議の諸条約や諸決議は、目覚めた中国の需要や要求にこたえていないとして、その妥当性を否定した。したがって、列強諸国の文字どおり真摯で誠実な努力— 各国が中国と協力して『不平等条約』の状態を解消させ、ワシントン会議の精神に具体的な成果を与えようとする努力— を挫折させてしまったのは、ほかならぬ中国側であったといえる。

1926年までの期間、中国以外のワシントン条約加盟国は、中国を含む各国すべてが同意していた会議の目的達成と伸張に向けて、異例とも言える緊密な協力をした。公平に見て列強諸国はよく協調して行動し、公正かつ適正な中国の要求に対しては、決して反対はしなかった。変革期中国の背信と偏狭にかかわらず、各国は、ワシントンで中国の同意を得た計画と期待の成就に向け、信託にそって努力したのである。」

